

コケ植物

① 名古屋市におけるコケ植物の概況

名古屋市に自生するコケ植物（蘚苔類）の種類は、最新の文献では、新修名古屋市史資料編（2008）に蘚類 128 種、苔類 42 種、ツノゴケ類 1 種の掲載がみられる。その後、2010 年 10 月より 2014 年 3 月までの間の調査で新たに検出した種類を加えると、蘚類 151 種、苔類 56 種、ツノゴケ類 1 種の合計 208 種となる。愛知県には、蘚類が 411 種（成田 2012）、苔類 153 種（山田 2000）の合計 564 種のコケ植物の自生があるので、そのおよそ 37%が名古屋市に自生していることになる。

本市は、ほぼ本州の中央部に位置する濃尾平野の南端部にあり、南部は伊勢湾の北端に面している。気候的には、年平均気温が 15°C 前後、年間降水量が 1600mm 前後の温暖な地であり、地形的には、東辺部の丘陵地を除き、東高西低のほぼ平坦な地である。東辺部は標高 60~80m の丘陵地が連なり、最高標高は北東部にある東谷山の 198.3m である。市内に生育するコケ植物はこのような自然環境からの影響のほか、人による土地の利用状況による影響も大きいものがある。北部から西部を取り巻くように流れる庄内川の流域は昔からの水田地帯であった。今では市街化が進み住宅地が広がってきているが、まだ多くの水田が残っている。直射光が当たる適度な湿り気のある田の畦道にはハイゴケ、ノミハニワゴケ、ヒロクチゴケ、ツチノウエノコゴケ、トヤマシノブゴケ、コネジレゴケ、コハタケゴケ等が見られる。市の中央部は早くから最も市街化が進んだところであるが、ビルの谷間の歩道の敷石の間には、ギンゴケ、ホソウリゴケが生育し、ナンキンハゼ、トウカエデ、クスノキ等の街路樹の樹幹には、サヤゴケ、ヒナノハイゴケ、ヒロハツヤゴケ、タチヒダゴケ、コモチネジレゴケ、クロヤスデゴケ、カラヤスデゴケ等、乾燥や大気汚染に対する抵抗性のある着生ゴケが見られる。この中のコモチネジレゴケは、帰化蘚類と考えられる種であり、市街地の中央を南北に走る交通量の多い国道 19 号線沿いに点在する社寺叢のムクやエノキの大木の樹幹に生育が見られ、興味深い分布の仕方をしている。市街地の中であって、古木や巨木が繁る自然度の高い熱田神宮の社叢には、コケ植物の生育に適した環境が多く、蘚類 34 種、苔類 7 種が記録（高木 1978）されている。東部一帯に広がる丘陵地には、アカマツ、コナラ、ヒカサキ等を主体とする疎林に、ハイゴケ、スナゴケ、フデゴケ、ツリバリゴケ、シシゴケ、キンシゴケ、ホソバオキナゴケ、カガミゴケ、アカイチイゴケ、クロヤスデゴケ等が見られ、この地域にある名古屋大学構内からは、蘚類 22 種、苔類 5 種が記録（高木 1978）されている。北東部にある市内最高標高の東谷山は海拔 200m 弱ではあるが、山地的要素もあり、隣接する尾張旭市に一部またがる森林公園地域には、蘚類 88 種、苔類 29 種、合計 117 種のコケ植物が記録（成田 1984）されている。

以上に挙げたように、本市域に分布するコケ植物のほとんどが本州の低地に分布する普通種であるが特徴的な分布をしている種が若干存在する。東部の丘陵地下部には、湧水に涵養された湿地があり、そこには、湿地に特有のミズゴケ類が生育している。世界に広く分布するオオミズゴケのほかに、北方系のイボミズゴケ、ハリミズゴケや愛知県内では生育地が僅かであるユガミミズゴケ、コアナミズゴケが分布している。いずれもオオミズゴケと同じ湿地に生育す

るが、ユガミミズゴケは緑区と守山区に1ヶ所ずつ、コアナミズゴケは守山区に1ヶ所記録されているのみであり、緑区の生育地は土地開発のため既に減んでいる。コアナミズゴケはゴルフ場の脇にあり、除草剤の影響が心配される。苔類のゼニゴケは市域のどこでもみられる種であるのに、準絶滅危惧に選定した最大の理由は、減少速度が速いことである。最近、ゼニゴケだと思っていたものをよくみると、帰化種のカサヅキゼニゴケであることが分かったが、他の所でも同様のことがよくある。市街地に限った現象なのか原因についてはよくわかっていないが、在来種のゼニゴケがいつのまにか帰化種に置き換わり、急速に減少しているのは事実である。今回レッドデータブックに掲載した18の絶滅危惧及び準絶滅危惧のうち、イバラゴケ、イボミズゴケ、ハリミズゴケ、マルバヒメクサリゴケ、イチョウウキゴケ等は、県や国レベルの絶滅危惧種でもあるが、その他は普通種である。しかし、市域ではゼニゴケを除き分布地や生育量が僅少な希少種になっており、このことが掲載するに至った最大の理由である。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

今回の調査において、最終的に絶滅、絶滅危惧、あるいは準絶滅危惧と判定されたコケ植物は、19頁のレッドリストの通りであった。掲載種は、絶滅1（苔類1）、絶滅危惧ⅠA類なし、絶滅危惧ⅠB類なし、絶滅危惧Ⅱ類3（蘚類2、苔類1）、準絶滅危惧15（蘚類12、苔類3）となった。

（執筆者 成田 務）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各種について、形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧についても、これらが目にふれる機会が多いことを考慮し、絶滅種・絶滅危惧種とほぼ同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（コケ植物）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の分類上の位置を示す門、綱、科名等を各頁左上枠外に記述した。科の範囲、名称、配列は一部を除き「日本の野生植物 コケ」（岩月善之助著，2001年，平凡社）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名及び学名は「愛知県の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブックあいち 2009－ 植物編」（愛知県 2009）、及び「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－ 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）」（環境省 2015）と同様、原則として「日本の野生植物 コケ」（平凡社）に準拠した。科内の配列は、学名のアルファベット順とした。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県 2015）の愛知県での評価、及び「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－ 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）」（環境省 2015）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種をレッドデータブックなごや 2015 掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。この部分の記述は、特に断っていない限り全国的な資料に基づくものである。

【分布の概要】

対象種の分布状況について、市内・県内・国内・世界での概要を記述した。

市内分布図は、各区の境界を実線で表示し、自生個体群の現存が確認された、または現存の可能性が大きいと判断された区を濃色、絶滅、または絶滅の可能性が高いと判断された区を点描で示した。

【生育地の環境／生態的特性】

対象種の生育環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生育状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生育状況、減少の要因等について記述した。

絶滅種については【過去の生育状況／絶滅の要因】として、対象種の名古屋市における過去の生育状況、絶滅の主な要因について文献、及び標本調査結果に基づき記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

異名、近似種との識別点、調査の際の留意事項等、以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、発行機関とその所在地（または雑誌名と掲載巻・頁）の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の理解の助けになる一般的文献を、著者、発行年、表題、掲載頁、発行機関とその所在地（または雑誌名と掲載巻・頁）の順に掲載した。

コケ植物 <苔類 タカサゴソコマメゴケ科>

タカサゴソコマメゴケ *Jackiella javanica* Schiffn.**【選定理由】**

1950年に千種区東山で一度採集された（服部 1952）だけで、その後報告はなく現存を確認できない。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅
愛知県2015	絶滅
環境省2014	リスト外

【形態】

植物体は黄褐色、茎は長さ1~2cmで匍匐し、葉は先が丸まったほぼ三角形で、瓦状に重なって斜めにつき、基部はやや茎に流下し、腹縁基部は小耳状。枝は少ない。葉身細胞は厚壁で、トリゴン（細胞の角隅）が大きく、表面が平滑。油体は各細胞に1個、楕円形で微粒の集合。腹葉は痕跡的に2~4に深裂。雌雄異株。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区東山で一度記録されている。

【県内の分布】

名古屋市以外に記録はない。

【国内の分布】

本州（愛知県、三重県、和歌山県）、四国、九州（屋久島）、琉球。名古屋市の東山は、本種の北限地である。

【世界の分布】

東アジアの熱帯～亜熱帯地域から台湾、中国、太平洋諸島を経て西南日本に分布する。

【生育地の環境／生態的特性】

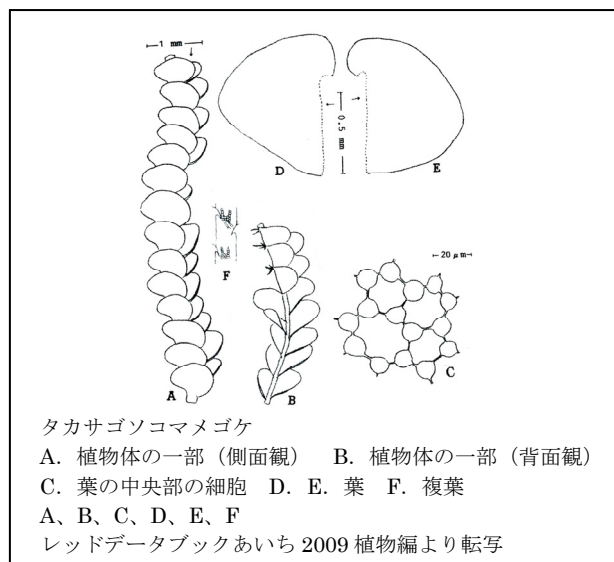
低地や低山地の常緑樹林下の湿った崖や法面岩上に群生する。茎は長さ5~20mmで斜上し、枝は少ない。

【過去の生育状況／絶滅の要因】

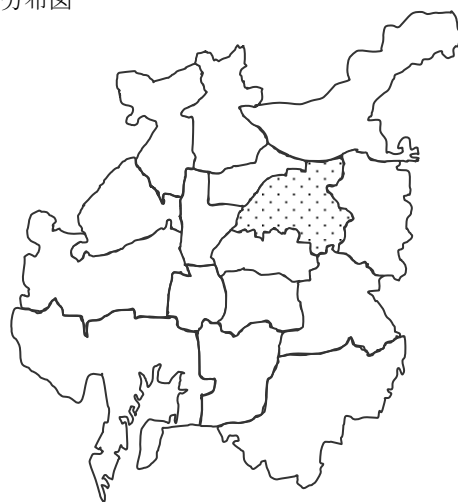
名古屋市では絶滅したと思われる。林道沿いの湿った崖や法面の岩上に生えるため、崖や法面の崩壊を防止する工事や森林伐採等により絶滅したものと思われる。

【特記事項】

岩月（2001）は、国内分布を静岡県以西～琉球としている。しかし、静岡県については確かな情報がない。



市内分布図

**【引用文献】**

服部新佐. 1952. 日本産苔類雑記 (15). 植物研究雑誌 27:53-59.

岩月善之助 (編). 2001. 日本の野生植物コケ pl.136, pp.245-246. 平凡社, 東京.

【関連文献】

孫福 正・山田耕作. 1964. 伊勢神宮宮域産苔類図鑑 p.178. 六月社, 大阪.

愛知県. 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 —植物編—p.711. 愛知県環境部自然環境課.

(執筆 成田 務)

コケ植物 < 蘚類 ミズゴケ科 >

ハリミズゴケ *Sphagnum cuspidatum* Ehrh. ex Hofm.

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本種は市内ではオオミズゴケとほとんど同じ分布域に生育しているが、オオミズゴケに比べ産量は極めて少ない。園芸用としての利用価値が高いオオミズゴケと同じ湿地で棲み分け或いは混生している。従ってオオミズゴケと同様に保全に留意する必要がある。

【形態】

オオミズゴケとほぼ同じ大きさの大型の種であるが、茎葉は舌状三角形で先端はやや鋭頭、上部の透明細胞にはらせん状の肥厚がある。枝葉は長楕円形で上部の縁は内曲し、先端は細長くとがる。透明細胞は楕円状線型で背腹両面とも孔は少なくはっきりしない。葉緑細胞は横断面で三角形、背面でより広く開く。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区、千種区、天白区、緑区。

【県内の分布】

名古屋市、瀬戸市、尾張旭市、犬山市、豊田市、新城市、設楽町。

【国内の分布】

北海道～九州に分布するが、オオミズゴケより北方に多い。

【世界の分布】

北半球に広く分布する（岩月 2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

市域では、本種が単独で生育しているところはほとんどなく、湧水により涵養された湿地にオオミズゴケと接して群落をなしていることが多いが、生育地は少なく、産量も少ない。国内ではオオミズゴケと比べより北方や高地に多く分布している。遺存寒地要素の植物と見ることができる。

【現在の生育状況／減少の要因】

園芸用に利用するオオミズゴケと一緒に生育しており、オオミズゴケと共に乱獲の恐れがある。

【保全上の留意点】

園芸家によるオオミズゴケの乱獲を防止するとともに、湿地の保全に留意する必要がある。

【特記事項】

オオミズゴケに比べて生育地が少なく、北方系の蘚類で、湿地の性格を意義付ける価値は高い。

【引用文献】

岩月善之助（編）. 2001. 日本の野生植物コケ pl.4,p.38. 平凡社, 東京.

【関連文献】

成田 務. 1973. 名古屋市内のミズゴケ類. くすのき 4:3. 名古屋理科同好会.

成田 務. 2001. 愛知県のミズゴケ類. 鳳来寺山自然科学博物館館報 40:47-51.

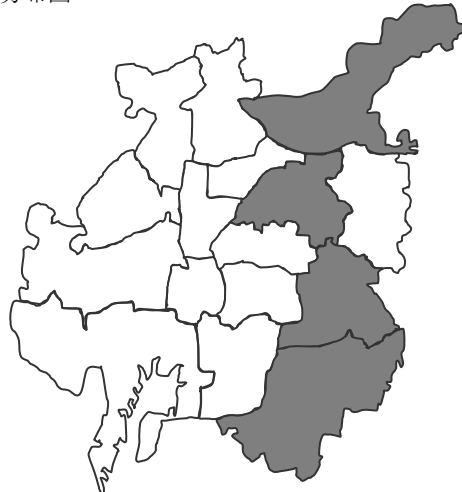
愛知県. 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 —植物編—p.684. 愛知県環境部自然環境課.



ハリミズゴケ

天白区島田緑地、2014年7月31日、成田務 14265

市内分布図



（執筆者 成田 務）

コケ植物 < 蘚類 アブラゴケ科 >

イバラゴケ（ケムシゴケ） *Calypstrochaeta japonica* (Card. et Thér.) Z.Iwats. et Nog.**【選定理由】**

南方系の種で、名古屋市は、国内での北限線上に近い位置にあるものと判断される。市内の産地は1ヶ所のみであり、絶滅危惧種として見守っていく必要がある。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

長さ5mm程の蒴柄に、透明な単細胞の刺が一面にあることからイバラゴケ、別名ケムシゴケと呼ばれる。茎は長さ2～3cmで僅かに分岐して斜上し、葉を緩く偏平状につける。葉は暗緑色で長さ2～3mm、倒卵形でやや非相称、葉先は短尖頭、中肋は短く2又する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山の樹林下を流れる小谷の湿岩上に少量生育している。

【県内の分布】

犬山市寂光院付近、新城市の鳳来寺山表道沿いや槇原川、亀淵川などの溪谷に見られる。

【国内の分布】

本州（中部以西）～琉球。

【世界の分布】

中国に知られている。温帯から亜熱帯にかけて分布する南方系の蘚類である（岩月2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

暖帯林下の日陰の湿った岩上に塊状の小さい群落をつくる。

【現在の生育状況／減少の要因】

着生している岩面の湿りが常に十分ではないため生育状態はよくない。産量は僅かである。好湿性の種であるので水湿不足や乾燥化が減少の要因となる。

【保全上の留意点】

陰湿な環境が維持されるよう周囲の環境に留意することが必要である。

【特記事項】

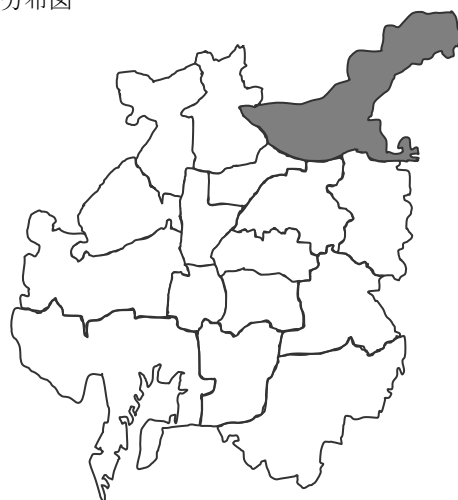
南方系の稀産種で、分布地理学上重要な資料となる。



イバラゴケ（ケムシゴケ）

守山区東谷山、1984年11月18日、成田務 7489

市内分布図

**【引用文献】**

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物コケ pl.87,p.161．平凡社，東京．

【関連文献】

高木典雄．1995．愛知県における蘚苔類．愛知県の植物相 pp.230-256．愛知県農地林務部自然保護課．

愛知県．2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 ―植物編―p.697．愛知県環境部自然環境課．

（執筆者 成田 務）

コケ植物 <苔類 クサリゴケ科>

マルバヒメクサリゴケ *Cololejeunea minutissima* (Sm.) Schiffn.**【選定理由】**

樹幹や枝に着生するため、空中湿度変化に敏感で、生育地周囲の樹木の伐採や開発などの影響を受け絶滅する恐れがある。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

植物体は白緑色、茎は長さ5~10mmで不規則に分枝、葉は折りたたみ型で円形~広卵円形、葉細胞の膜は薄く、トリゴン（角隅）はない。葉下片は卵形で頂端に1~3細胞からなる2歯がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

社寺林（緑区、南区、昭和区）、緑地（天白区）の樹幹に着生している。

【県内の分布】

名古屋市、刈谷市、岡崎市、豊田市（足助町）、新城市。

【国内の分布】

本州（宮城県鹿島台町以南）、四国、九州、琉球、小笠原。

【世界の分布】

北アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ、ネパール、中国、台湾（岩月 2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

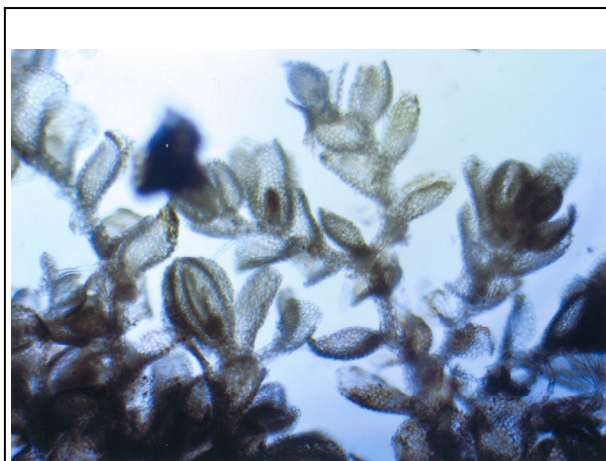
おもに樹幹や枝に着生する。他のヨウジョウゴケ属 *Cololejeunea* と比較すると、やや乾燥気味の環境に生育している。

【現在の生育状況／減少の要因】

緑区の鳴海八幡宮や氷上姉子神社等の社叢や天白区の相生山緑地の樹木の幹や枝に着生している。周辺の樹木の伐採や開発による大気環境の乾燥化の進行に適応できなくなると減少する。

【保全上の留意点】

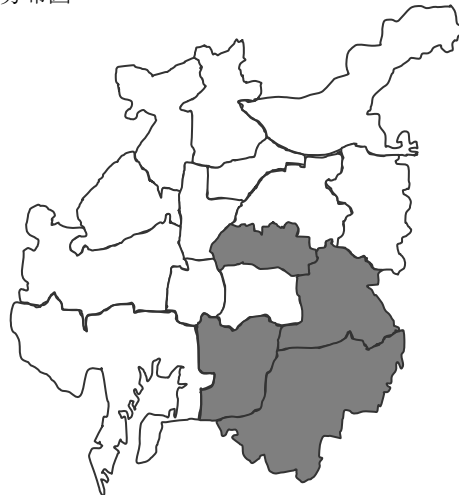
周囲の環境の保全に留意する。



マルバヒメクサリゴケ

緑区鳴海八幡宮、1996年7月11日、成田務 8540b

市内分布図

**【引用文献】**

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物 コケ p.298．平凡社，東京．

【関連文献】

岩月善之助・水谷正美．1972．原色日本藓苔類図鑑 p.350．保育社，大阪．

孫福 正・山田耕作．1964．伊勢神宮宮域産苔類図鑑 p.178．六月社，大阪．

愛知県．2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 ―植物編―p.717．愛知県環境部自然環境課．

（執筆者 成田 務）

コケ植物 <蘚類 ミズゴケ科>

コアナミズゴケ *Shangnum microporum* Warnst. ex Card.**【選定理由】**

北海道から九州まで広く分布する種であるが、市域では生育の見られる湿地は極めて少ない。オオミズゴケと同じような環境に生育しており、オオミズゴケと共に採取される恐れがある。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

オオミズゴケと比べてやや小さく繊細で柔らかい。茎葉は三角状舌形、上部の縁は内曲し、先端はささくれる小歯がある。枝葉は卵状披針形、やや非相称で深く凹み、上部の縁に鋸歯がある。透明細胞の腹面にはほとんど孔が無く、背面には壁に沿って小さな孔が不連続な列をつくって並んでいる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区森林公園東部のゴルフ場コース脇の小湿地に生育している。

【県内の分布】

名古屋市のほか、尾張旭市森林公園、新城市有海原湿原などに分布している。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

朝鮮、中国（岩月 2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

低地や低山地に産するミズゴケで、常に水に浸るような湿地やその近辺の池や沼の水辺に生育する。

【現在の生育状況／減少の要因】

生育地は、ゴルフ場がつくられる以前にはあったと思われる大きな湿地の一部分が残ったものと考えられる。これまでの生育地の確認は1ヶ所のみである。除草剤等の農薬に敏感で害を受けやすく減少する要因となる。

【保全上の留意点】

生育地はゴルフ場の内部であるので、採取される心配はないが、除草剤や化学肥料の使用に留意が必要である。

【特記事項】

最近では、生育を見つけるのが困難になっている。

【引用文献】

岩月善之助（編）. 2001. 日本の野生植物コケ pl.2,p.36. 平凡社, 東京.

【関連文献】

成田 務. 1973. 名古屋市内のミズゴケ類. くすのき 4:3. 名古屋理科同好会.

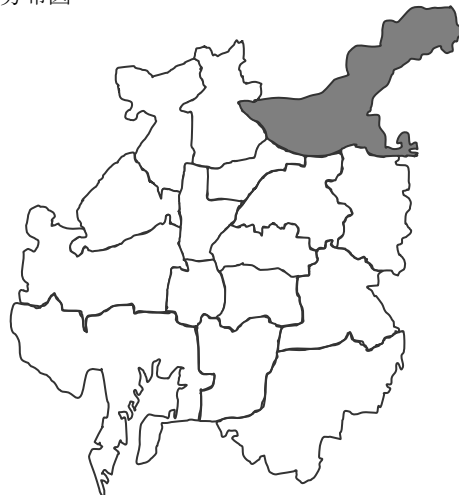
成田 務. 2001. 愛知県のミズゴケ類. 鳳来寺山自然科学博物館館報 40:47-51.



コアナミズゴケ

守山区森林公園、1970年11月8日 成田務 4197

市内分布図



（執筆者 成田 務）

コケ植物 <蘚類 ミズゴケ科>

オオミズゴケ *Sphagnum palustre* L.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

国内はもとより世界に広く分布する普通種であるが、全国レベルで準絶滅危惧に選定されているのは、園芸用としての利用価値が高く、収奪の危機に曝されているためである。本市においても、その趣旨に沿って準絶滅危惧と評価する。

【形態】

ミズゴケの中では大形の種で、茎は長さ10cm以上で、頂端部に多くの枝が集まる。茎の表皮細胞には明瞭なせん状肥厚があり、1～4個の孔がある。茎葉は舌形で先端はささくれる。枝葉は広楕円形で深く凹み鱗状につく。枝葉の横断面で葉緑細胞は狭二等辺三角形。底辺は葉の腹面側にある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、千種区、昭和区、天白区、緑区。

【県内の分布】

名古屋市、尾張旭市、春日井市、瀬戸市、日進市、刈谷市、豊明市、豊田市（旧市域、旧稲武町、旧足助町、旧下山村、旧小原村、旧藤岡町）、岡崎市、豊川市、蒲郡市、豊橋市、田原市、新城市、設楽町、東栄町、豊根村など。

【国内の分布】

日本全土に分布する。

【世界の分布】

世界中に分布する普遍種である（岩月2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

平地や丘陵地の斜面下部などに、主として湧水により涵養された湿地やため池の水辺に大きな群落を形成している。

【現在の生育状況／減少の要因】

市の北部や東部の丘陵地にある湿地やため池は、都市化の波に洗われ、土地改良や埋め立てが進行し、生育環境が減少しているのが大きな要因になっている。

【保全上の留意点】

湿地という環境の保全に留意する必要がある。

【特記事項】

ミズゴケ類の生育する湿地には、東海地方固有の植物や動物が生息・生育する所でもあり、湿地を保全することの意義は大きい。

【引用文献】

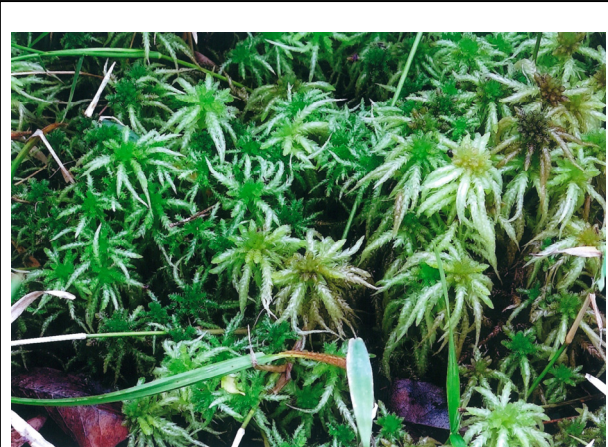
岩月善之助（編）. 2001. 日本の野生植物コケ pl.2, p.35. 平凡社, 東京.

【関連文献】

成田 務. 1973. 名古屋市内のミズゴケ類. くすのき 4:3. 名古屋理科同好会.

成田 務. 2001. 愛知県のミズゴケ類. 鳳来寺山自然科学博物館館報 40:47-51.

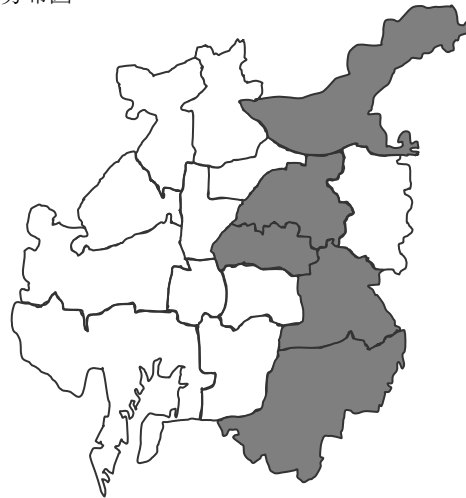
愛知県. 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 ―植物編―p.702. 愛知県環境部自然環境課.



オオミズゴケ

守山区東谷山、2012年10月10日、成田務 撮影

市内分布図



（執筆者 成田 務）

コケ植物 < 蘚類 ミズゴケ科 >

イボミズゴケ *Sphagnum papillosum* Lindb.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【選定理由】

オオミズゴケと同じ湿地で接して群落を形成して生育していることが多いが、オオミズゴケに比べ出現頻度は低い。尾張部に分布が多くあり、三河部は少ない。オオミズゴケとよく似た外観をしており、オオミズゴケと共に採取される恐れがある。

【形態】

オオミズゴケと同じくらいの大きさで、外観も良く似ている。茎や枝の表皮細胞に細かいラセン状の肥厚がある。茎葉は舌形で先はささくれる。枝葉は円状楕円形で深く凹む。枝葉の葉緑細胞と接する透明細胞の側壁面に多くのパピラがあり、これによりオオミズゴケと区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、千種区、天白区、緑区。

【県内の分布】

名古屋市、豊明市、日進市、知多市、新城市。

【国内の分布】

北海道から九州に広く分布するが、本州中部以北に優勢である。

【世界の分布】

北半球に広く分布し、ニュージーランドにも分布している（岩月 2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

生育地は、オオミズゴケとよく似た環境で丘陵地下部の湧水により涵養された湿地に生育している。オオミズゴケと比べ生育地は少ない。生態的特性はオオミズゴケと同様である。

【現在の生育状況／減少の要因】

生育地の多くは緑地や公園内にあり、群落を形成し生育しているのがみられる。保護されているが、オオミズゴケと共に採取されることがある。

【保全上の留意点】

湿地を形成させている周辺的环境保全に留意する必要がある。

【特記事項】

ミズゴケ類の生育する湿地は、湿地生動植物の自生地、生息・生育地でもあり、ミズゴケ類の保全は同時に湿地生動植物の保全にもつながるものである。

【引用文献】

岩月善之助（編）. 2001. 日本の野生植物コケ pl.2, p.35. 平凡社, 東京.

【関連文献】

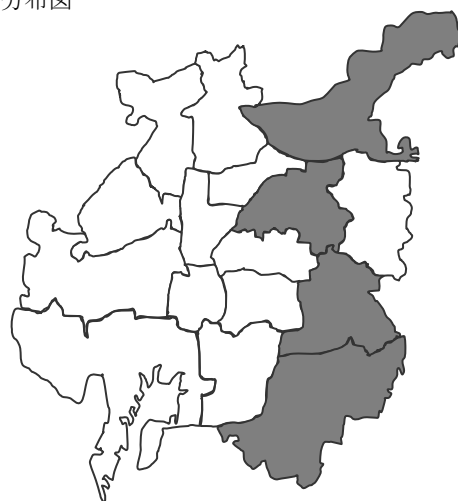
成田 務. 1973. 名古屋市内のミズゴケ類. くすのき 4:3. 名古屋理科同好会.

成田 務. 2001. 愛知県のミズゴケ類. 鳳来寺山自然科学博物館報 40:47-51.

愛知県. 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 —植物編—p.703. 愛知県環境部自然環境課.



市内分布図



(執筆者 成田 務)

コケ植物 < 蘚類 ミズゴケ科 >

ユガミミズゴケ *Sphagnum subsecundum* Nees et Sturm

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

本州中部以北から北海道まで分布する種であるが、市域では生育している湿地は極めて少ない。オオミズゴケと同じ湿地にオオミズゴケの群落に接して生育しており、一緒に採取される恐れがある。

【形態】

黄緑色～黄褐色でオオミズゴケより小形であるが、大きさや形に変異が多い。枝は少なく、あっても1ヶ所に1～2本で短い。茎葉は卵状舌形で深く凹み、頂部は円形でささくれる。枝葉は広卵形で深く凹み、片側に著しく歪んでいる。枝葉の横断面で葉緑細胞は樽形になり、背腹両面に開くが腹面側が僅かに広く開く。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区 (Nar. 5793)、緑区 (Nar. 2215a)。

【県内の分布】

名古屋市、設楽町、新城市、岡崎市、豊橋市、幅豆町、田原市。

【国内の分布】

北海道から九州に広く分布するが、本州中部以北に優勢である。

【世界の分布】

北半球周極地域、インド、タイ、バリ、ニューギニア (岩月 2001)。

【生育地の環境／生態的特性】

生育地は、オオミズゴケとよく似た環境で丘陵地下部の湧水により涵養された湿地に生育している。オオミズゴケと比べ生育地は少ない。生態的特性はオオミズゴケに似ているが水に浸かるような水分の多い所に生育する。

【現在の生育状況／減少の要因】

オオミズゴケの生育する湿地の水に浸かるような環境に生育している。生育地はわずか2ヶ所であったが、緑区滝ノ水地区にあった1ヶ所は土地区画整理事業により消滅した。

【保全上の留意点】

生育地である湿地を成立させている環境の保全に留意する必要がある。

【特記事項】

北周極要素種で、名古屋市の蘚類フロラの性格を論ずる場合の重要な資料となる。

【引用文献】

岩月善之助 (編). 2001. 日本の野生植物コケ pl.2,p.36. 平凡社, 東京.

【関連文献】

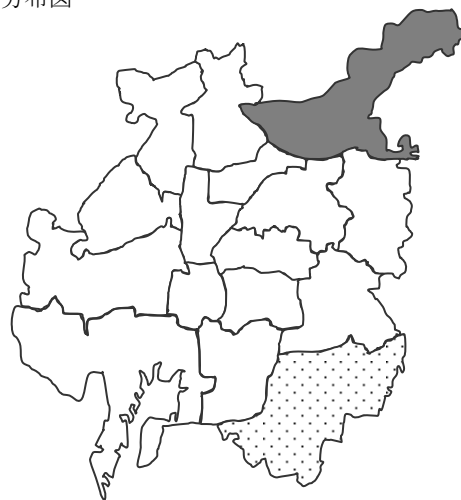
成田 務. 1973. 名古屋市内のミズゴケ類. くすのき 4:3. 名古屋理科同好会.
成田 務. 2001. 愛知県のミズゴケ類. 鳳来寺山自然科学博物館館報 40:47-51.



ユガミミズゴケ

守山区東谷山、1974年10月10日、成田務 1975

市内分布図



(執筆者 成田 務)

コケ植物 <蘚類 イクビゴケ科>

イクビゴケ *Diphyscium fulvifolium* Mitt.**【選定理由】**

本種は丘陵地の繁った林下の地上や林道に沿った穏やかな環境の土上に生育しているが、市内の生育地は少なく、2地区が知られているのみである。いずれも公園内であり、採取の対象になるものではないが、道の改修や拡幅などにより削り取らないよう留意する必要がある。

【形態】

茎は非常に短く 1mm 以下、蒴は長さ 3～4mm の麦粒状、茎葉は長楕円状披針形、葉身は長さ 3～6mm で葉頂から中肋が芒状に突出し、上部の葉では葉身の 2 倍以上の長さになるものもある。葉身は 2 細胞層からなり、表面に乳頭がある。雌苞葉はやや小形で上部は毛状突起で縁どられている。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山、千種区東山公園。

【県内の分布】

山地を中心に広く分布している。

【国内の分布】

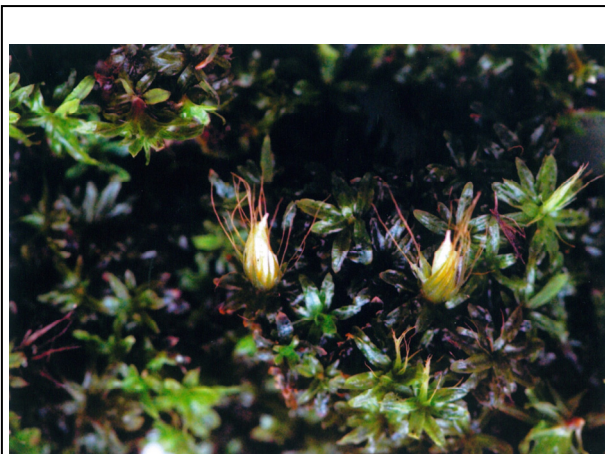
本州～琉球。

【世界の分布】

東南アジアに広く分布する（岩月 2001）。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



イクビゴケ

守山区東谷山、2013年4月19日、成田務 撮影

【生育地の環境／生態的特性】

丘陵地林下の直射日光の当たらない極端に乾燥することのない穏やかな環境に、マット状の群落を形成し生育している。乾燥すると葉は強く巻縮する。

【現在の生育状況／減少の要因】

大きなマット状の純群落を形成して元気に生育している。樹陰をつくる樹木の伐採や乾燥化を招く土地開発は、減少の大きな要因となる。

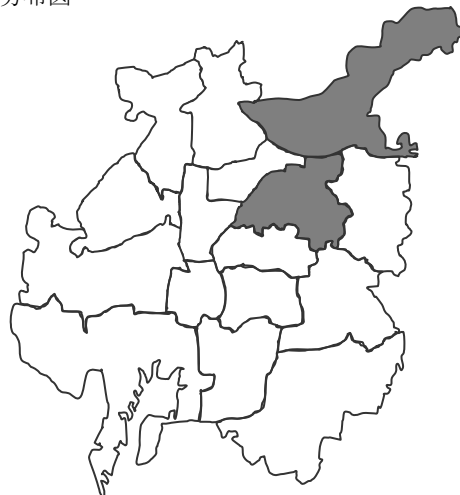
【保全上の留意点】

直射日光が当たったり乾燥化が進む恐れのあるような環境を変える工事に留意する必要がある。

【特記事項】

本種の生育は、日陰で強い乾燥のない穏やかな環境を表す指標となる。

市内分布図

**【引用文献】**

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物コケ pl.6,p.42．平凡社，東京．

【関連文献】

成田 務．1998．名古屋市域のコケ植物．シダとこけ 15:20-26．

（執筆者 成田 務）

ハミズゴケ *Pogonatum spinulosum* Mitt.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

丘陵地の樹林下の路傍や切り通しなどの露出した土上に散生する。原糸体は永存性で直射光や湿り気などの環境変化には非常に敏感で、周囲の樹林伐採などの影響を受けて絶滅するおそれがある。

【形態】

永存性の原始体を本土に広げ、その上に退化した黄褐色の配偶体を形成する。茎は短く2mm前後、葉は鱗片状で、表面に薄板はなく葉緑体はあまり含まない。葉は茎に密着し、湿っても広がらず、中肋は長い芒状に突出する。蒴柄は2～4.5cm、蒴は円筒形。雌雄異株。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山山道沿いの樹林下の土上に生育している。

【県内の分布】

名古屋市、瀬戸市、豊田市、岡崎市、新城市、設楽町、東栄町などに分布している。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮、極東ロシア、フィリピン、ベトナム（岩月 2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

樹林下の直射光のあたらない土上で、極端な乾燥が起こらなく適度な湿気が保たれる穏やかな環境に生育している。

【現在の生育状況／減少の要因】

東谷山の山道沿いの土壌は乾燥傾向にあり配偶体を見つけるのが困難になっている。

【保全上の留意点】

直射光が当たったり、乾燥化を招くような樹木の伐採に留意することが必要である。

【特記事項】

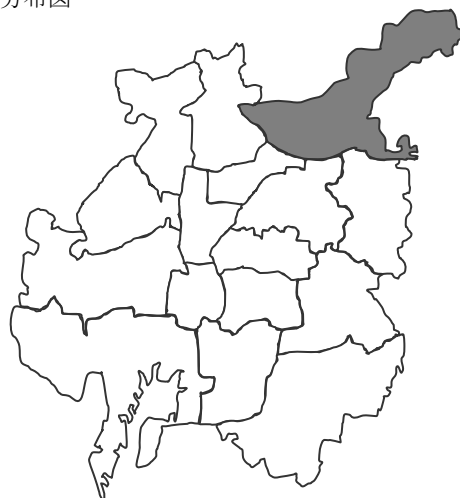
原糸体だけでは確認ができない。配偶体が形成されてはじめて存在が確認できる。



ハミズゴケ

守山区東谷山、2000年11月26日、成田務 9780

市内分布図

**【引用文献】**

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物コケ pl.11,p.47．平凡社，東京．

【関連文献】

成田 務．2008．名古屋の生物 コケ植物．新修名古屋市史資料編 自然 pp197-206．名古屋市．

（執筆者 成田 務）

コケ植物 < 蘚類 スギゴケ科 >

ウマスギゴケ *Polytrichum commune* Hedw.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

北海道から九州まで、低地から高山まで広く分布する種であるが、市域では生育しているところは少ない。背の高い大型のコケで、明るい所の粘土質の土上に群生しているが、湿地のミズゴケ類に混じって生育していることもある。芝生状に群生する様子が美しく、コケ庭作りによく用いられる種で乱獲が心配される。

【形態】

茎はほとんど枝分かれせず高さ 5～20cm になる大形のコケ。葉は鞘部から線状披針形にのび、乾くと茎に接着して縮れない。鞘部を除き薄板に覆われる。薄板は 5～7 細胞の高さがあり、薄板の端細胞は横断面で凹形。雌雄異株。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区森林公園、千種区東山、天白区島田緑地に分布している。

【県内の分布】

名古屋市のほか、日進市、豊明市、瀬戸市、豊田市、岡崎市、新城市、設楽町、東栄町などに分布している。

【国内の分布】

北海道～九州。

【世界の分布】

世界各地（岩月 2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

低地から高山までの日当たりのよい粘土質の土上にマット状の群落をつくって生育する。湿地にもミズゴケ類や草本類に混じって生育する。雌雄異株で雌雄は混在せず、別々に群落を形成している。

【現在の生育状況／減少の要因】

生育地は少なく、群落の大きいものはない。園芸対象になる種であるので、採取されることが減少の要因になると危惧される。

【保全上の留意点】

日当たりのよい場所を好むコケであるので生育地が 1 日中日陰になるような樹木の繁茂に留意する必要がある。

【特記事項】

雌雄異株で雄株は雌株より小形である。雌雄は通常混在することなく別々に群落を形成している。

【引用文献】

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物コケ pl.12, pp.47-48．平凡社，東京．

【関連文献】

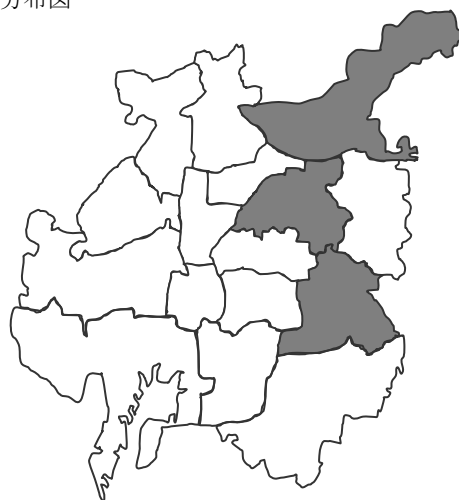
成田 務．2008．名古屋の生物 コケ植物．新修名古屋市史資料編 自然 目録 p22．名古屋市．



ウマスギゴケ

天白区島田緑地、2014 年 7 月 31 日、成田務 撮影

市内分布図



（執筆者 成田 務）

コケ植物 < 蘚類 シッポゴケ科 >

ツリバリゴケモドキ *Bryohumbertia subcomosa* (Dix.) Frahm**【選定理由】**

明るい丘陵地の林縁や切り通しの土上に生育するシッポゴケ科の小形の蘚類で、本州～琉球に広く分布するが、市内では1ヶ所で見ついているだけで希少種であり、個体数も多くない。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

茎は長さ 5～10mm、葉は幅広い基部から線状にのび長さ 5～7mm、中肋は強壯で葉先に達し、葉身部の半分を占める。蒴柄は湿ると白鳥の首のように曲がり、ヤマトハクチョウゴケに似ているが植物体は約2倍の大きさがある。帽は僧帽形で下部に房状の毛が並んでいる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

千種区東山。

【県内の分布】

名古屋市、日進市、豊田市、岡崎市、新城市。

【国内の分布】

本州、四国。

【世界の分布】

アジアの熱帯（岩月 2001）。



ツリバリゴケモドキ

千種区東山、2013年1月21日、成田務 撮影

【生育地の環境／生態的特性】

日当たりのよい明るく比較的乾燥している丘陵地の路傍や切り通しの土上にまばらな群落を成して生育している。

【現在の生育状況／減少の要因】

公園内の切り通しになっている遊歩道脇の土上にも生育している。公園内にあり、園芸対象にもならないが、周囲の植物の繁茂により、日陰になると衰退して減少の原因となる。

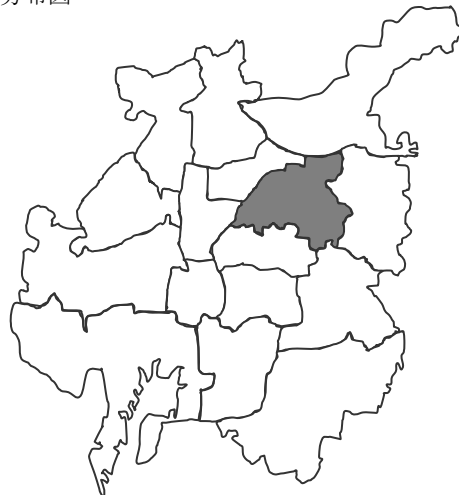
【保全上の留意点】

覆いかぶさるような植物があれば取り除くよう留意する必要がある。

【特記事項】

ツリバリゴケ属には似た種があるが帽の付いた蒴があると区別し易い。

市内分布図

**【引用文献】**

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物コケ pl.24,p.67．平凡社，東京．

【関連文献】

成田 務．2005．豊田市自然環境基礎調査報告書 植物 蘚類 p.100．豊田市．

（執筆者 成田 務）

コケ植物 < 蘚類 シッポゴケ科 >

イクタマユハケゴケ *Campylopus gemmiparus* Z.Iwats. et al.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

Iwatsuki et al. (2002) により新種として発表された種である。それまでマユハケゴケとして絶滅危惧種（国ランク VU）に選定されていたものの中にはマユハケゴケとは異なる新種があることが分かった。その結果それまで知られていた愛知県のものはすべて新種に相当したため『レッドデータブックあいち 2009 -植物編-』では評価対象外にされた種である。本州に広く分布するが市内での発見例は少なく独特な形態を示す蘚類でもある。

【形態】

茎は長さ 1~2cm、茎頂の葉腋の短枝の上に長さ 0.5~2mm の多数の小葉状で落葉性の多数の無性芽をつける。葉先に荒い鋸歯があること、中肋があること等で、マユハケゴケと区別することができる。

【分布の概要】

【市内の分布】

千種区東山植物園内のソメイヨシノの樹幹基部土上、名東区牧野ヶ池緑地の林下。

【県内の分布】

名古屋市、日進市、岡崎市、豊橋市、新城市。

【国内の分布】

愛知県、静岡県、山口県。

【世界の分布】

東アジア、欧州、北米、アフリカ。



イクタマユハケゴケ

名東区牧野ヶ池緑地、2012年11月9日、成田務 撮影

【生育地の環境／生態的特性】

生育地は、植物園内のソメイヨシノの樹幹基部の地上、樹林内の腐植土上や倒腐木上に見られる。

【現在の生育状況／減少の要因】

植物園内のソメイヨシノの樹幹基部のものは、ヒトの通行による土埃の被覆や乾燥化により減少して痕跡的になっているが、樹林下のものは、腐植土や倒腐木上に小群落を形成して生育しているのが見られる。

【保全上の留意点】

植物園のサクラの樹幹基部の保全は難しいが、樹林下のものは、林床の草本類の繁茂により被覆されないように留意する必要がある。

【特記事項】

茎頂の葉腋の短枝に多数の無性芽を付ける様子が眉刷毛に似ているのでマユハケゴケの和名がついている。

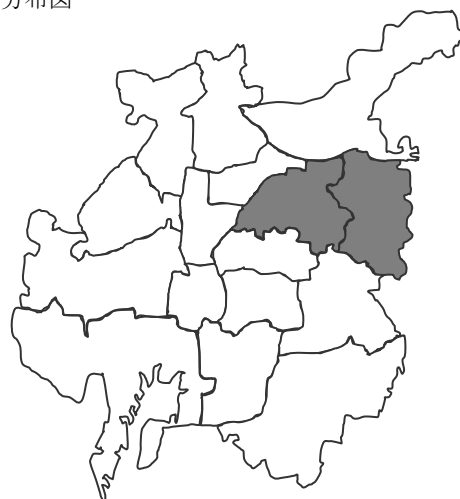
【引用文献】

Iwatsuki, Z., J.-P. Frahm, T. Suzuki and N. Takaki. 2002. Gemmiferous species of *Campylopus* in Japan. J. Hatt. Bot. Lab. 92:175-180.

【関連文献】

成田 務. 2008. 名古屋の生物 コケ植物. 新修名古屋市史資料編 自然 p.205. 名古屋市.

市内分布図



(執筆 成田 務)

コケ植物 < 蘚類 シッポゴケ科 >

シッポゴケ *Dicranum japonicum* Mitt.**【選定理由】**

半日陰の樹林下の腐植質に富んだ土壤に生育するシッポゴケ科の中では大形の種である。北海道から九州の山地に広く分布する普通種であるが、本市には守山区と千種区の丘陵地に僅かに見られるのみの希少種になっている。

【形態】

茎は長さ 3～8cm、白色の仮根をつける。葉は長さ 7～11mm、披針形で上部は溝状に凹む。湿ると茎に直角に近い角度で開出する。葉縁上半には鋭い歯がある。中肋は細く、上部背面には鋭い歯のある 2～3 列の低い薄板がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区東谷山、千種区東山公園。

【県内の分布】

名古屋市、瀬戸市、豊田市、岡崎市、新城市、豊橋市、設楽町、東栄町、豊根村等に広く分布している。

【国内の分布】

北海道から九州まで広く分布している。

【世界の分布】

朝鮮、中国（岩月 2001）。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



シッポゴケ
守山区東谷山、1998年9月10日、成田務 8955

【生育地の環境／生態的特性】

半日陰の疎林下の腐植土上に生育しているが大きい群落にはなっていない。直立する茎をもつ大型の蘚類であるため、極度の乾燥には弱く、半日陰の適度な湿り気が保たれる腐植質に富んだ土上に群生している。

【現在の生育状況／減少の要因】

守山区は東谷山に小群落が 2 ヶ所、千種区は東山公園に小群落が 1 ヶ所あるが、周囲の植物が繁って被いかぶさるようになり生育が難しくなっている。

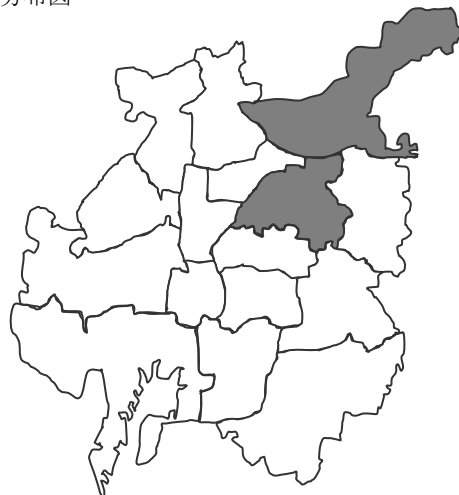
【保全上の留意点】

周囲の植物が生い繁って覆いかぶさることのないよう留意する必要がある。

【特記事項】

カモジゴケと外観が似ているが仮根が白いことで区別できる。

市内分布図

**【引用文献】**

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物コケ pl.28,p.73．平凡社，東京．

【関連文献】

成田 務．2008．名古屋の生物 コケ植物．新修名古屋市史資料編 自然 目録 p.22．名古屋市．

（執筆者 成田 務）

コケ植物 < 蘚類 シッポゴケ科 >

カモジゴケ *Dicranum scoparium* Hedw.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

県内には広く分布する普通種で、腐植質に富む半日陰の土上に群生する直立茎をもつ大形の蘚類である。市内では3ヶ所の産地が知られるのみであるが、丘陵地にあり、土地開発の危機に直面している。

【形態】

茎は2~8cm、多くの褐色の仮根をつける。葉は長さ7~10mmで、卵状披針形の基部から細い溝状に凹む葉身となり上半部の葉縁には歯がある。中肋は強く葉頂に達し、上部背面に2~4列の鋸歯のある低い薄板がある。葉は密につき乾燥すると鎌状に曲がる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、名東区、緑区に分布している。

【県内の分布】

名古屋市、瀬戸市、豊田市、岡崎市、新城市、豊橋市、設楽町、東栄町、豊根村等に広く分布している（Takaki1964）。

【国内の分布】

北海道から琉球まで広く分布している。

【世界の分布】

北半球の各地、ニュージーランド（岩月2001）。

【生育地の環境／生態的特性】

腐植質の多い半日陰の地上に群生する。腐植質に富んだ土上に生え、密についた葉は乾燥すると同じ方向に鎌状に曲がる。

【現在の生育状況／減少の要因】

守山区、名東区、緑区に分布していたが緑区では土地改良事業による開発のため、生育地が消失し絶滅した。守山区と名東区はいずれも1地点に分布しているが、周囲の繁茂する植物による被覆が生育を妨げ減少の要因となる。

【保全上の留意点】

半陰半湿の穏やかな環境を維持することが大切である。

【特記事項】

シッポゴケ科の中では大型の蘚類であるが雌雄異株で雄株には矮小のものもある。シッポゴケと外観が似ているが、仮根が褐色であることで判別できる。

【引用文献】

岩月善之助（編）. 2001. 日本の野生植物コケ pl.28,p.72-73. 平凡社, 東京.
Takaki, N. 1964. A revision of the genus *Dicranum*. J. Hatt. Bot. Lab. 27:73-123.

【関連文献】

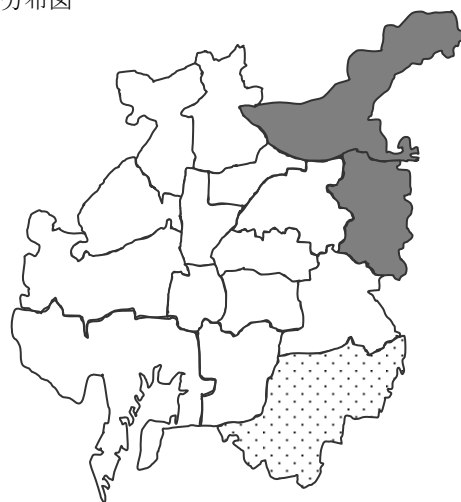
成田 務. 2008. 名古屋の生物 コケ植物. 新修名古屋市史資料編 自然 目録 p.22. 名古屋市.



カモジゴケ

守山区東谷山、2003年3月4日、成田務 10278

市内分布図



（執筆者 成田 務）

コケ植物 < 蘚類 ヤナギゴケ科 >

ヤナギゴケ *Leptodictyum riparium* (Hedw.) Warnst.**【選定理由】**

湿った地上や岩上、時に水中に生育することもある蘚類である。本市では唯一水中に生育するコケであり、生育地が1ヶ所のみの稀産種である。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

配偶体は生育環境による変異が著しい。葉は披針形で細長く漸尖し、長さ1.5~2mm。中肋は1本で葉の1/2以上あり、時に3/4に達するものもある。葉身細胞は線形で薄壁。翼細胞は方形~短形で薄壁。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区（才井戸流）。

【県内の分布】

県内に広く分布している。

【国内の分布】

北海道~九州。

【世界の分布】

世界に広く分布（岩月 2001）。



ヤナギゴケ

守山区才井戸流、2000年11月26日、成田務 9791

【生育地の環境／生態的特性】

本種は湿った地上や岩上、水中など多様な環境に生育するが、市内では湧き出た地下水が流れ込んでいる用水路の水中に生育している。

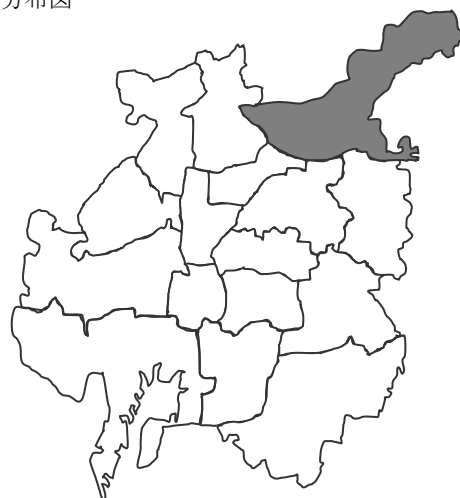
【現在の生育状況／減少の要因】

用水路を流れる水は増減はあるが常に流れており、川底に群落を形成している。用水路の水が干上がるような土地開発事業が減少の大きな要因となる。

【保全上の留意点】

土地開発事業による環境の変化について常に留意する必要がある。

市内分布図

**【引用文献】**

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物コケ pl.101,p.185．平凡社，東京．

【関連文献】

成田 務．2008．名古屋の生物 コケ植物．新修名古屋史資料編 自然 目録 p.22．名古屋市．

（執筆者 成田 務）

コケ植物 <苔類 ゼニゴケ科>

ゼニゴケ *Marchantia polymorpha* L.**【選定理由】**

人家付近の建物の北側や常緑樹の下などの日陰で湿り気のある土上や岩上に生育するが、都市化が進むにつれ、地面はコンクリートに覆われ乾燥化が進み、生育できる環境が急速に減少している。

【形態】

植物体は葉状で、長さ 3～10cm、幅 7～10mm で 2 叉状に分岐し、中央に濃緑色の線がある。葉状体背面中央に円形の杯状体ができ、中に無性芽をつくる。雌雄異株。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区、西区、天白区、千種区、名東区、中区、中村区、中川区、熱田区、緑区に分布を確認している。市内に広く分布するが減少が著しい。

【県内の分布】

広く分布するが、都市部では減少傾向にある。

【国内の分布】

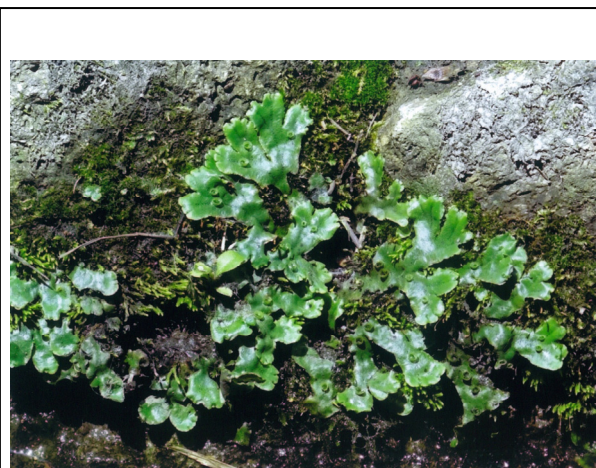
北海道、本州、四国、九州(岩月・水谷 1972)。

【世界の分布】

世界の各地(岩月 2001)。

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



ゼニゴケ

西区庄内緑地、2013年7月1日、成田務 撮影

【生育地の環境／生態的特性】

人家付近の直射光の当たらない湿り気のある土上や岩上に生育する。2 叉状に分岐し群生する。葉状体の背面中央の各所に杯状体ができ、中に円盤状の無性芽を作り繁殖する。雌雄異株。

【現在の生育状況／減少の要因】

日陰の湿り気のある土上に隙間なく覆うように群生する。以前にはよく目についたが、近年市街地を中心に減少している。また、よく似た形態をした帰化苔類のミカヅキゼニゴケに置きかわっていることがある。都市化の進行による生育環境の減少、同じ環境に生育する帰化苔類との競争に負けること等が要因である。

【保全上の留意点】

必要以上に地面をコンクリート等で覆うことを避ける。勢力の強い帰化種を駆除する。

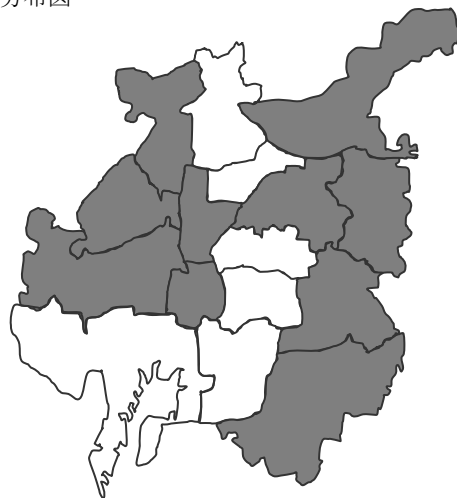
【引用文献】

岩月善之助・水谷正美、1972. 原色日本蘇苔類図鑑 pl.48,p.365. 保育社, 大阪.
岩月善之助(編). 2001. 日本の野生植物 コケ pl.88,p.315. 平凡社, 東京.

【関連文献】

寺尾恭平、1991. 三重コケの会ニュース 16(1):2-3.

市内分布図



(執筆者 成田 務)

コケ植物 <苔類 ウキゴケ科>

ウキゴケ *Riccia fluitans* L.

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	ランク外

【選定理由】

休耕による水田の減少、ため池の埋め立てによる減少などによる生育地の減少、更に、除草剤や殺虫剤の使用による水質汚濁など本種の減少や枯死等に影響をあたえる環境の変化が進行している。

【形態】

植物体は葉状体で淡緑色、線形、長さ10～30mm、幅1～2mm、まばらに数回叉状分岐し、先端は、凹形となる。植物体の腹面には、仮根や鱗片状の付属物はない。植物体の内部には、大形の気室があるが、気質孔はない。

【分布の概要】

【市内の分布】

守山区、名東区、天白区、緑区の水田地帯や用水路、ため池などに分布している。

【県内の分布】

都市部を除いた農村地帯に広く分布している。

【国内の分布】

北海道から琉球諸島にかけて分布している (Iwatsuki2004)。

【世界の分布】

世界の各地 (岩月 2001)。



ウキゴケ

名東区猪高緑地、2012年11月9日、成田務 撮影

【生育地の環境／生態的特性】

稲刈り後や休耕の水田、池沼の岸边、用水路、湧水の流れる溝など、湿った土上や水中で団塊状になって生えるが、時には水面上に浮かぶこともある。1年生植物で、水中型と地上型の2型がある。水中型は生殖器官ができず、仮根を生じない。地上型は稀に生殖器官をつけ、仮根を生じる。

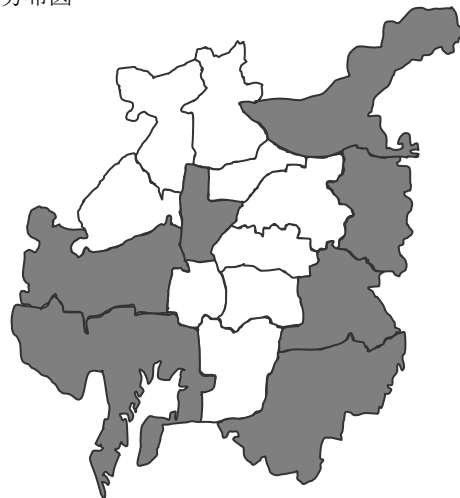
【現在の生育状況／減少の要因】

守山区の大村池や名東区の水田には、よく発達した群落がみられた。ため池の護岸工事や水田地帯の改修工事による生育地の減少や農薬の使用による害により減少している。

【保全上の留意点】

農薬に敏感で害を受けやすい。農薬の散布には配慮が必要である。

市内分布図



【引用文献】

岩月善之助 (編). 2001. 日本の野生植物 コケ pl.190,p.316. 平凡社, 東京.

Iwatsuki, Z. 2004. New Catalog of the Mosses of Japan 182pp. Hatt.Bot.Lab., Nichinan.

【関連文献】

岩月善之助・水谷正美. 1972. 原色日本蘚苔類図鑑 p.369. 保育社, 大阪.

愛知県. 2009. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 ―植物編―p.721. 愛知県環境部自然環境課.

(執筆者 成田 務)

コケ植物 <苔類 ウキゴケ科>

イチョウウキゴケ *Ricciocarpos natans* (L.) Corda

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

水田や池沼の埋め立ての増加により、主な生育地が減少していること、除草剤や殺虫剤などの散布による水質環境の悪化が生育を脅かしていること、農薬の影響に敏感で、水田地帯の自然度を推察する指標となることなどにに基づく。

【形態】

植物体は葉状体で緑色、長さ 10～15mm、幅 4～8mm、二叉状分岐を繰り返しイチョウの葉に似た形になる。半円形以上になると 2 個体に分かれる。表面は光沢があり、中央に浅い溝がある。裏面は長いリボン状で暗紫色の腹鱗片が多数生える。

【分布の概要】**【市内の分布】**

水田地帯、休耕田、溜め池等に分布する。

【県内の分布】

平野部、山間部に広く分布する。

【国内の分布】

全国に広く分布するが北海道には記録がない。

【世界の分布】

世界の各地に分布している（岩月 2001）。



イチョウウキゴケ

守山区大村池、2013年6月18日、成田務 撮影

【生育地の環境／生態的特性】

水田、休耕田、溜め池等の水面に浮遊する水上型と、稲刈り後の水が引いた水田の泥土上や、水面が下がった池の湿土上に生える陸上型の二型が見られる。水上型は裏面に腹鱗片がよく発達しており、陸上型は腹鱗片はあまり発達せず、仮根が生える。

【現在の生育状況／減少の要因】

守山区、名東区、天白区、緑区、中川区等から分布が知られている（名古屋市 2008）が、年により、生育地が転々と変わるため、生育地の特定ができない。農薬に弱く、水田地帯の分布が減少している。冬期、葉状体の大部分は腐るが、先端部分の長さ 3～4mm が芽状に残り越冬する。

【保全上の留意点】

殺虫剤や除草剤などの農薬に敏感で害を受けやすいので、農薬の使用には考慮が必要である。

【引用文献】

岩月善之助（編）．2001．日本の野生植物 コケ pl.189,p.317．平凡社，東京．

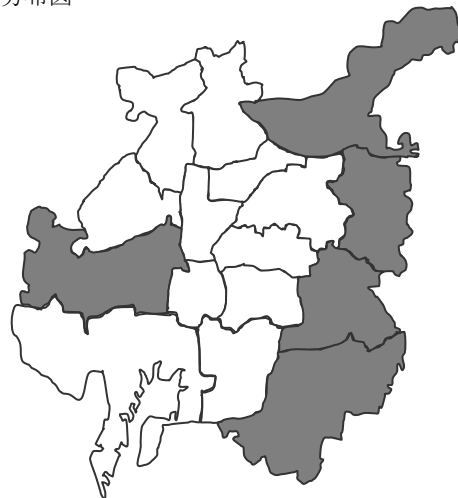
【関連文献】

岩月善之助・水谷正美．1972．原色日本蘇苔類図鑑 pl.48,p.367．保育社，大阪．

愛知県．2009．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2009 ―植物編―p.722．愛知県環境部自然環境課．

名古屋市．2008．コケ植物．新修名古屋市史資料編 自然 pp.20-25．

市内分布図



（執筆者 成田 務）